

関東の縄文中・後期集落と墓制

菅谷 通保

1. 基本の考え方

先史時代の人々が世代を超えて何らかの情報を残す意思を持ち合わせたことは、列石墓のような記念碑的な性格も想定できる構築物があることから十分想像できる。当事者が込めていた意思は我々の思考が及ぶ範囲で類推するしかないが、我々との思考の隔たりを正しく測れている保証がないのだから、「私はこう共感する」以上の接近方法は無い。

どんな家に住みどんな原則で集落を営み死者をどう葬ったかは、当事者の意図によらず残っている考古資料から私たちが再構築を試みるしか方法はない。遺物・遺構・遺跡に相互に似ているものと似ていないものがあることから我々が勝手に設定する《型式》を有効な接近手段と期待して、表題についての時間的・系統的な変化を提示してみよう。

型式は人間に原因のあるモノ・コトのまとまりなので、別々の側面の事象（ここでは集落と墓制）に設定した型式の間にも何らかの関連性はあるはずだ。一種類のモノの型式どうしの関係性を追及した大きな成果が縄文土器の広域編年だが、これに住居・集落や墓制に仮定する型式を重ね合わせることが、私が試みたい考古学の方法である。

個々の土器型式は固有の分布範囲を持ち、隣接する型式どうしが接する地理的範囲もある。この範囲は時期によって変動し、ある型式の分布範囲が次の時期には2～3に分裂したり、複数の型式が住み分けていた範囲が一つにまとまったりと、民族の移動や国の興亡を想起させる面がある。しかしひとつの土器型式の広がりや、ある集団の勢力範囲に結び付けて良いかは即断できない。住居や集落のありかたは、土器型式の広がりや系統的な変化と必ず一致するわけではないからだ。現在の我々が個人個人の様々な結びつきを持ち、時に名も知らない誰かと縁があることに気づいて驚くが、縄文時代の人々も複雑な社会的結びつきの中で生

きていたことが、土器・住居と集落・墓制を重ね合わせることで想定できる。ヒトの活動痕跡を型式として重ね合わせる中から見えてくるモザイクが何を描き出すのかを期待しつつ、基礎的な検討を繰り返していこうと思っている。

2. 住居と集落の「型式」設定の考え方

考古資料（遺構）としての住居は、内外を隔てる壁や屋根・内外をつなぐ出入口・上屋を支えた柱・火を用いる炉といった施設を構築した痕跡の集合で、夫々の施設が差しさわりなく機能するために相対的に固有の位置関係を持たせている。同じ場所に時期の異なる住居の構築があった場合、二重・三重に露光を繰り返したフィルムのように痕跡は重なり合うが、一時期の施設の組み合わせと相対的位置関係が把握できれば、時期毎の組み合わせに分解可能である。

1920年代、竪穴住居址の検出が始まってすぐに1本の線を仮定すると複数の柱穴を線対称の位置関係で把握できると意識され、「主軸」という概念が形成され始めた。後藤守一（1940）や塚田光（1956）は住居址の類型化を進める中で主軸という用語を積極的に用いた訳ではないが柱穴の線対称的配置を明らかに意識している。加藤緑（1975）は屋内から外部へ向かうという方向性・橋本正（1976）は上屋構造上の約束事と考えた。橋本の考えは成否を検討すべき作業仮説で一般化できるか未検証、加藤の考えは集落内の住居址分布を分析する際の重要な視点になると評価している。

集落の分析には、竪穴住居址に類型を見出す視点が応用できる。集落は住居や貯蔵穴といった機能的に異なる多様な施設を、成員の居住や共同作業に整合するよう配置しているとみなすが、出入口によって住居を方向性のある施設と考えることで環状に検出された集落の間に異なる構成上の原則を考えることができ、時間的・地域的に限定的な原則の移り変わりや分布域の変動を見出すことが出来るだろう。

なお、集落内で同時に機能していた遺構の組み合わせを考える際に、

私は土器の時間的細分に多くを期待しない。例えば主柱6本が普通な住居の時期に、7本分の主柱穴を検出して2本が近接する住居址なら、この2本は1本の柱を据えなおした結果で、同時に機能していた柱は6本だと考える。集落も同様に考えるべきと主張したい。

3. 墓制の「型式」設定の可能性

縄文時代の墓制を考える上での制約は極めて大きく、人骨が残る遺跡かどうかで得られる情報が異なる。埋葬人骨は墓制に関わる資料として最も確実だが貝塚・洞穴・低湿地にほぼ限られ、こうした遺跡では墓坑の形状を捉えづらい傾向にある。逆に遺構の形状を捉えやすい貝塚を伴わない台地上の遺跡では、人骨から墓坑と確認できる可能性は極めて少なく、副葬品と解釈する遺物から可能性を指摘する。しかし時期や地域によって比率は異なるが、貝塚等で検出した埋葬人骨のすべてが副葬品を伴う訳ではないから、出土品を根拠とする限り墓坑を捉える比率は低くなる。こうした条件の中で墓制を追求する方法を次のように考える。

人骨に基づき一定地域での埋葬姿勢の時間的変化を土器型式編年に対比しながら整備する。具体的には屈葬・伸展葬それぞれの行われた時期の確定と、人骨の齢査定から成年・少年・乳幼児といった年齢に応じた埋葬方法の区別のしかたを把握することである。埋葬状態での体軸に沿った骨の広がりや長さや幅を検討すれば、特定の時期の墓坑の長短軸の比率や軸長の範囲に限られるから、人骨の遺存しない遺跡で検出した土坑の中から規模と形状に基づいて可能性の高いものを抽出することができる。抽出した「墓坑」の配列や分布を人骨検出遺跡での人骨の配列や分布と対照すれば、ある時期・地域での墓域を概念的に捉えることが可能になる。こうして一地域の墓域を構成する原則の変遷を仮設し、複数地域の変遷を対比しながら各原則の地域的な広がりを捉えることで、墓制の「型式」の広域編年の可能性が浮上してくる。ただし大規模な貝塚形成は時期も地域も限られるし、東京湾・霞ヶ浦の沿岸地域でも埋葬人骨が確認されていない時期が少なくない現状では、希望的観測と言わざ

るを得ない。今回試みに南関東の現状を紹介し、可能性を示したい。

4. 住居と集落の変遷

・勝坂・阿玉台式～加曽利EⅡ式期

例) 松戸市 子^こ和^わ清水^{しみず}貝塚 台地平坦部に、密集する貯蔵穴群を取り囲み、二系統の住居が集落を構成する「環状集落」。構成する住居は環状の中心を向かず、主軸を並列に配列する。

・加曽利EⅢ式～称名寺式期

例) 成田市 長^{なが}田^た雉^き子^こヶ^が原^{はら}・長^{なが}田^た香^か花^{はな}田^だ遺跡 台地平坦部に住居が散在し、貯蔵穴も集中せず散在。住居は時期的特徴から主軸判定が困難。

・堀之内1式期

例) 酒々井町 伊^い篠^の白^{しら}幡^{はた}遺跡 住居の多くは舌状台地縁辺の緩斜面に出入口を斜面側に向けて構築するが、等高線に平行に南東に向けるものが2軒ある。貯蔵穴は小規模で数が極端に減少し、住居より台地中央寄りに位置する。乳幼児の墓と思われる屋外埋設土器も中央寄りに分布するが、貯蔵穴とは分布範囲が異なる。

・堀之内2式以降

例) 市原市 祇^ぎ園^{おん}原^{はら}貝塚 台地縁辺に近い窪地を取り巻くように、弧状に住居を構築し、出入口が窪地に向く。堀之内2式～加曽利B2式期の住居は窪地からやや距離が離れるが、加曽利B3式～曾谷式期では窪地に接近する。この間貯蔵穴らしき土坑は稀で規模も小さい。安行1式～2式期では住居の系統が西関東起源のものに置き換わり、安行3a式期では東北起源の住居の影響も生じるが、出入口を窪地に向けて囲む配置は継続し、窪地との距離・住居の間隔も接近して居住域は狭まる。井戸を思わせる貯蔵穴が出現し、集落内の最も大規模な住居の近くに集中する傾向を見せる。集落内の大規模な住居の立地は加曽利B1式期以降ほぼ同じ場所で継続する。

◎集落を構成する遺構相互の配置が変化するなかで、貯蔵穴の多少と集中・分散が時間的に連動するように見えることは、貯蔵食料の管理のありかたを追求する必要を示唆している。

5. 墓制の変遷

例) 茂原市 ^{しもおおだ}下太田貝塚

・加曽利EⅠ式期 屈葬で膝の屈折は弱い。逆位の土器で頭部を覆う。体軸が並行するよう配列する。乳幼児埋葬でも墓坑を土器片で覆う例を確認しているが、小規模な墓坑に納めただけが多い。

・加曽利EⅡ式～EⅣ式期 屈葬で膝の屈折の強い例が目立つ。膝は立てるものと胸元まで引き付けるものがある。後者では墓坑が前者より一回り小さく、前者は墓坑が深い傾向がある。墓を環状に配列する墓域を形成。遺骸の体軸は環の中心からの放射状の軸に重なるか直交する配置である。盤状集積に類する2次葬も確認できた。環状墓域を構成する年齢層は乳幼児以上で、若年層は膝の揃えが緩い傾向がある。前半の環は小規模（直径10m前後）・後半の環は大規模（直径30m弱）である。乳幼児では埋設した土器底部に埋納する例、直径50cm前後の小規模な墓坑に埋納する例があるが、環の線上と内側に配置する。イノシシ幼獣・若獣の埋葬が環の外にあるが、乳幼児の集中範囲に近い。

・称名寺式～堀之内1式期 1次葬未検出。（他遺跡事例を参照すると伸展葬中心と考えられる）埋設土器での乳幼児埋納が見られるが散在状態。ただし前段階後半の環状墓域の範囲にほぼ重なり、完形土器を使用する。ミイラ状態の遺骸を多数再葬した改葬墓を3基検出（構築時期は次期に下る可能性がある）。

・堀之内2式～加曽利B2式期 ほぼ伸展葬だが少数膝の屈折の弱い屈葬があり、膝頭は揃わない。全体として方形の範囲を埋め尽くすように、体軸方向がバラバラな1次葬が密集するが、体軸の並行する組み合わせが複数存在する。ほとんどが仰臥葬だが伏臥・側臥が少数あり、側臥では墓坑の幅が狭い。この方形墓域の中にも盤状集積に類する2次葬

が含まれる他、1次葬の墓坑壁際に他個体の骨を寄せた例もあった。墓域に埋葬した年齢は若年層以上で、乳幼児の埋葬状態は不明である。

◎加曽利EⅠ式期の土器被葬は、骨化した遺骸の一部を改葬する際の日印とも考えられる。千葉県内で高い頻度で検出されることから、この頃には死者の一部を改葬することが墓制の中で確立していたのだろう。頭骨以外でも四肢骨の一部が欠落する例は、改葬痕跡の可能性もある。この時期は廃屋墓と評される住居址床面付近で検出した人骨が圧倒的に多く、下太田貝塚の墓域のありかたと整合的に捉えられるか、それとも二系統以上の墓制が併用されるのか、検討を進めるべき課題である。

加曽利EⅡ式～Ⅳ式期の環状の墓域構成は、千葉県内では積極的に類例と指摘できる例は無いが、神奈川県川崎市宮添遺跡など環状に配列したと解釈できる墓坑と見て不都合のない規模・形状の土坑群の例があり、南関東に一般化できる可能性がある。

称名寺式～堀之内1式期の乳幼児土器棺葬は、屋内外の完形埋設土器が圧倒的に多い時期であり、人骨片の検出も少なくないことから、関東・中部にかけて広く行われたとみて良い。しかし同時期の人骨を多数埋納した改葬墓中に乳幼児～少年期の人骨も検出されるから、全ての乳幼児を土器棺葬の対象とみることもできない。死産新生児が土器棺に埋葬されたという解釈が、現状での理解である。下太田貝塚以外の遺跡でこの時期の1次葬人骨が多数検出されている（大規模な改葬墓に収めた遺骸は土葬を経っていない）ので、改葬を前提に1次葬を行う集団とそうでない集団との違いが何に起因するかが大きな課題である。

堀之内2式～加曽利B2式期の方角範囲に密集する墓域は、市川市姥山貝塚M地点を類例と指摘でき、東京都なすな原遺跡の土坑群に類似性が見られるから、現状では晩期にかけて南関東に広く行われた墓制と評価できよう。

6. まとめ

集落と墓制の特徴を「型式」として概念的に捉えることを志向して記述してきたが、いまだ道半ばの感が強い。集落に関しては、子和清水貝塚に見たような貯蔵穴を住居が囲むありかたは、中部・西関東系の住居と共に東関東に出現すると見え、同地域由来と現状考えている。長田雉子ケ原遺跡のありかたはこれが変質したものと捉え、伊篠白幡遺跡のありかたは更に引き継いだものであろう。祇園原貝塚の窪地に向かって出入口を向けた住居を取り囲むありかたは、住居の背後の高まり（馬蹄形貝塚・環状盛土遺構）とも整合し鬼怒川流域から東京湾東岸にかけて地域的な広がりを持つと予想できるが、単に前段階からの変容と見るべきかなお検討したい。貯蔵食料の管理のありかたが、集落構成の変容に関わるとの予測から、フラスコ状土坑の成立・展開も視野にいれ東北を含めて隣接地域での変遷を対比する必要は明白である。

墓制に関しては、他の人骨多出地域との間に空白地帯が挟まる状況は変わることが無いので、遺跡の中で墓坑の可能性のある遺構を捉えることが肝要となる。共伴する遺物だけに頼らず、遺構自体の特徴からの広範な注意と検討が必要であろう。

最後に、つたない考えを語る機会を与えていただいた、福島県文化財センター白河館の皆様、特に館長菊池徹夫先生と副館長本間宏さんにお礼申し上げます。

資料出典

杉原荘介・戸沢充則 1971「縄文時代の遺跡 姥山遺跡」『市川市史 第一巻』市川市史編纂委員会 吉川弘文館 260～276 頁
『子和清水貝塚 遺構図版編』1976 松戸市教育委員会
『なすな原遺跡—No.1 地区調査』1984 なすな原遺跡調査団
『酒々井町伊篠白幡遺跡』1986 財) 千葉県文化財センター
『花山遺跡』1988 財) 君津郡市文化財センター
『長田雉子ケ原遺跡・長田香花田遺跡』1989 財) 印旛郡市文化財センター

『祇園原貝塚』1999 財) 市原市文化財センター

『下太田貝塚』2002 財) 総南文化財センター

西澤 明 2005「墓制から見た縄文集団」 明治大学考古学研究室編『地域と文化の考古学Ⅰ』六一書房 349～368 頁

参考文献

後藤守一 1940「上古時代の住居 (上)・(中)・(下)」『人類学考古学講座』雄山閣
塚田 光 1956「縄文時代竪穴住居の研究」『縄文時代の基礎研究』同刊行会 1982 57～134 頁
加藤 緑 1975「中期縄文人の住まい」Circum-Pacific 1 環太平洋学会
橋本 正 1976「竪穴住居の分類と系譜」考古学研究 23-3 考古学研究会
菅谷通保 1995「竪穴住居から見た縄紋時代後・晩期」帝京大学山梨文化財研究所研究報告第6集 帝京大学山梨文化財研究所 97～142 頁
倉田恵津子 2000「子和清水貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1』千葉県 512～517 頁
菅谷通保 2007「松戸市子和清水貝塚の「環状集落」について」異貌 25 共同体研究会 94～111
菅谷通保 2007「多遺体埋葬」『縄文時代の考古学9 死と弔い 葬制』同成社 112～121 頁

追記 フラスコ状土坑の坑底から骨格の揃った人骨を検出した例が少なからずあるが、形態は堅果類貯蔵施設として合理的であるから、構築の目的は貯蔵穴・人骨検出は2次的利用の結果とみなしている。今回貯蔵穴として扱った他の形態の土坑も、遺体の姿勢を整えるには不合理な形態であるから同様の判断である。壁がゆるやかに立ち上がる円形の土坑は、軸方向が直交する墓坑2基重複の可能性はあるが、深さ50cmを超えるようなものは墓坑としての合理性に欠けるだろう。

遺跡分布図

子和清水貝塚

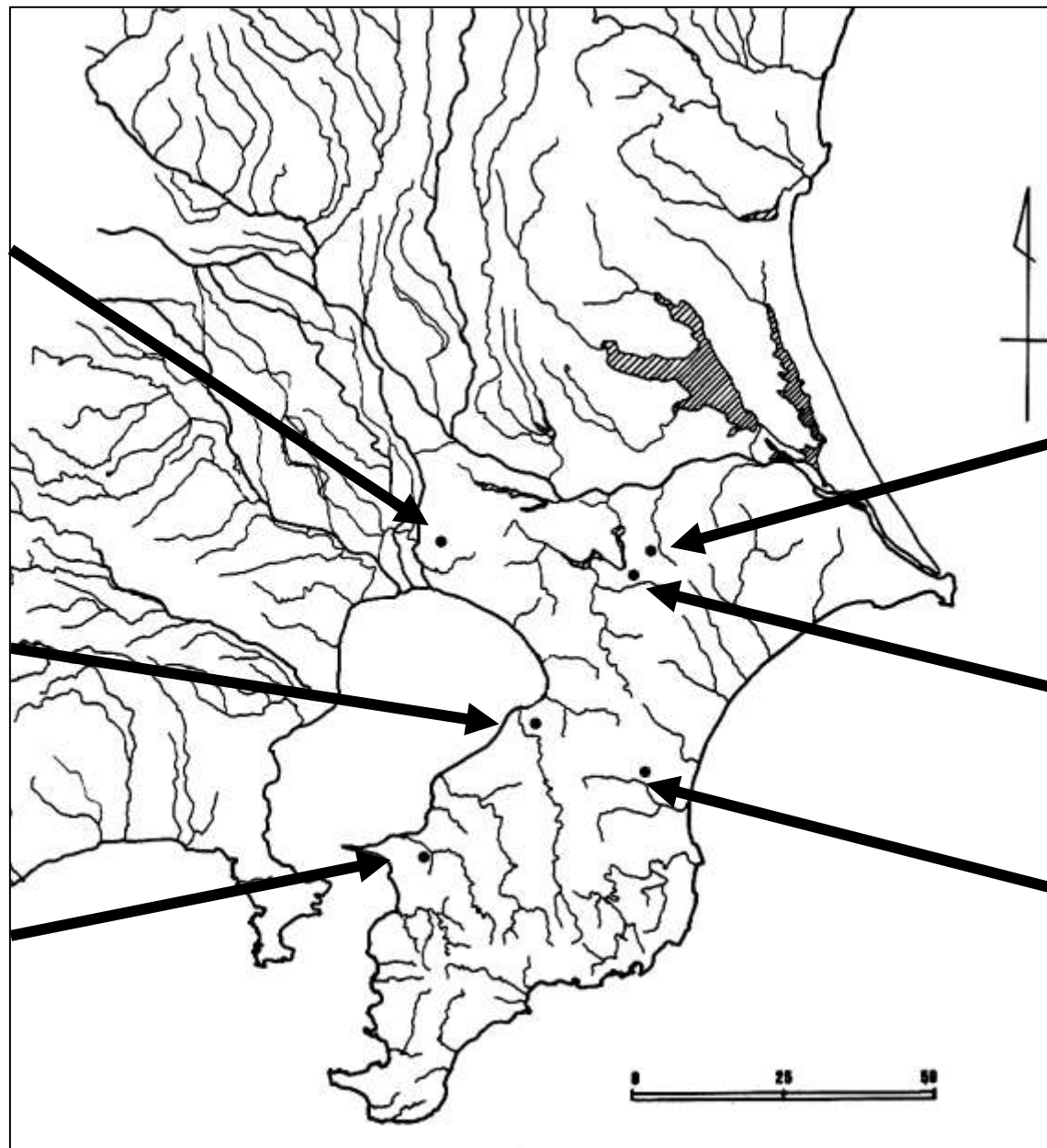
祇園原貝塚

花山遺跡

長田雉子ヶ原遺跡

伊篠白幡遺跡

下太田貝塚



参考図 1 子和清水貝塚

報告書付図2を転載

東京湾奥から北に向かって侵入する国分谷の左岸、標高28m程の台地縁辺部に営まれた、勝坂・阿玉台式期～加曽利EⅢ式期の集落。





参考図 2 長田雉子ヶ原遺跡

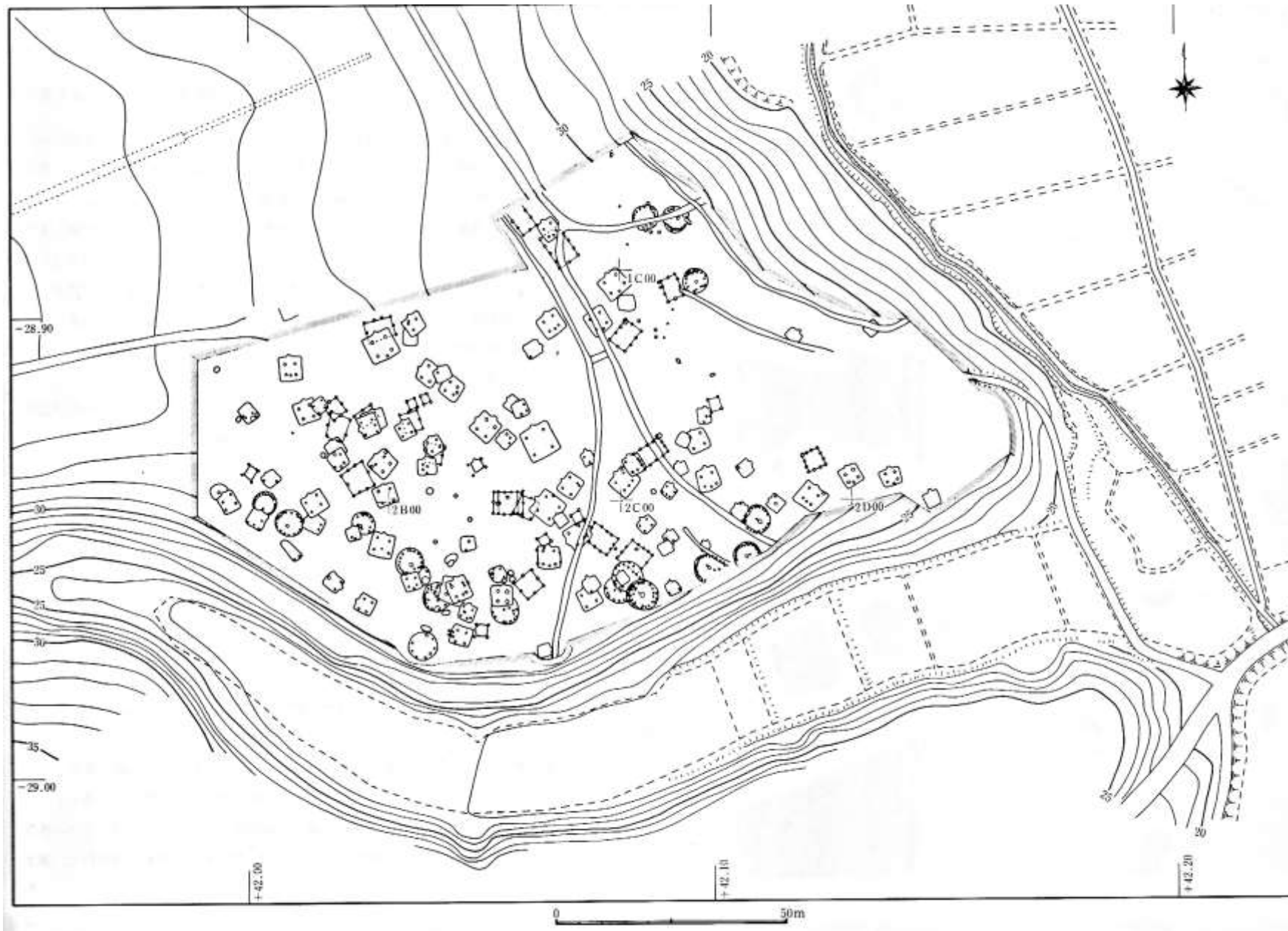
報告書付図1を転載

印旛沼から北東に侵入する谷奥右岸の標高40m前後の台地上に営まれた加曽利EⅢ式期～称名寺式期の集落。

参考図 3 伊篠白幡遺跡

報告書第2図を転載

印旛沼から南東に侵入する谷奥に注ぐ左岸の標高32m前後の台地上に営まれた堀之内1式期の集落。



参考図 4 祇園原貝塚

報告書第3図を一部削除し
て転載



東京湾中部から南東に侵入する谷口右岸の標高28m前後の台地上に営まれた称名寺～安行3a式期の集落。東京湾までの間はほぼ沖積地で、縄文時代には直接東京湾を遠望できたろう。

上総国分尼寺の寺域に一部にかかりこれと国分僧寺の間に位置する。周辺には弥生～平安時代の大規模な集落があり、現市原市役所も直近。



報告書第2図の一部に加筆
して転載